

22PO-am384

薬学生の基礎実習における態度評価と学業成績との相関

○浅田 麻琴¹, 藤岡 志緒¹, 富永 達朗¹, 日置 和人¹, 神谷 浩平¹, 日高 興士¹,
北條 恵子¹, 瀧本 竜哉¹, 袁 徳其¹, 佐々木 秀明¹, 津田 裕子¹, 福留 誠¹ (神戸学院
大薬)

【目的】薬学教育現場において近年、学習支援を要する学生の早期抽出と、適切な学習行動への介入方法に興味が高まっている。武田らは要支援学生の早期抽出に関連して、実習に対する不満群と学業不振との有意な相関を報告した¹⁾。そこで本研究では、本学 2 回生対象の基礎薬学実習(化学、分析、及び生物)における態度評価が専門科目学業成績と有意に相関するかを検証することとした。

【方法】基礎薬学実習において担当スタッフが学生の実習態度(遅刻、欠席、服装の乱れ、レポート提出遅延、私語、居眠り等)をチェックし減点した。基礎点からの減点が一定量を超えると、B~D 評価となる。一方、各年度の専門科目学業成績としては専門科目 GPA を用いた。まず、2018 年度前期、及び 2017~2013 各年度通期を対象として、各学生 GPA の要約統計量を得た(算出には自治医科大学無償提供のソフト EZR を用いた)。次に、得られた統計量に基づいて、第 1 四分位数(下位 25%)、又は、第 2 四分位数(中央値)を各対象年度における成績上下層を分けるラインとして各々定義した。要するに、上下に分けるラインを 2 種類定義した。最後に、それら GPA 上下層と、実習評価(A 以上又は B 以下)とが有意に相関するかを、fisher 正確確率検定により検証した。

【結果と考察】2016 年度(下位 25%で分けたとき)、及び 2015 年度(下位 25%及び中央値で分けたとき)の P 値は 0.05 を上回ったが、その他の調査対象期間の全てについて P 値は 0.01 を下回り、実習態度評価と専門科目学業成績との有意な相関が確認された。総体的に GPA 平均及び標準偏差が小さい場合、つまり全体が低成績に偏るとき、相関の有意性が否定される傾向があるのではないかと推測した。

1) 武田直仁 et al., 日本薬学会 138 年会要旨 2018, 28P-pm05.